

「試験」からみたウェーバー比較歴史社会学

大川 清丈¹

【要旨】

本稿は、「試験」というパースペクティブからマックス・ウェーバーの比較歴史社会学を検討する。ウェーバー社会学は、前近代社会から近代社会への転換を論じた「近代化論」としばしば位置づけられてきた。しかし、彼自身は「近代化」という言葉をほとんど使用せず、むしろ、さまざまな二項図式を重ねあわせて、多角的な観点を使いながら分析を行ってきた。そこで、ウェーバー比較歴史社会学は、ドイツと（1905年までの）中国の官僚任用試験をめぐる二項図式「専門試験／教養試験」を議論する。その際、彼自身が生きたドイツ社会の位置づけ、および彼がドイツで受けた試験を参照する。

キーワード：試験，マックス・ウェーバー，比較歴史社会学

1 はじめに

筆者はこれまでマックス・ウェーバーの著作を「近代化論」あるいは「比較歴史社会学」として読み解き、その方法の現代的な解釈を示してきた（大川，1990, 1991, 1993, 1996a, 1996b, 1997, 2012）。

本稿の目的は、具体的には「試験」というパースペクティブから、ウェーバーの方法を比較歴史社会学としてとらえ返すことにある。なお、ここでウェーバーの「方法」とよぶものは、理解社会学や客観性、価値自由等の

1 ezm05033@nifty.com

『学問論集』で論じられている議論より広く、「方法論議のなかには必ずしもあらわれていないが、具体的な業績では盛んに駆使されているような、そういう独自の方法」（大塚，1966: 53）を念頭においている。

2 ウェーバーにおける「近代化」

前稿「近代化論から歴史社会学への転換」（大川，2012）は、ウェーバーからラインハルト・ベンディクスを経由した潮流を「近代化論から」の道と見なしたが、本稿はウェーバーを近代化論者として安易にくくることには慎重であるべきではないか、という立場から「歴史社会学（あるいは比較歴史社会学）への」道²を議論する。

ここで「近代化」および「比較歴史社会学」概念を暫定的に定義する。

ヴェーラーによれば「『近代化』とは革命的・不可避的・不可逆的・世界的・複合的・体系的・長期的な、だが、段階的に区分可能で、傾向としては同質化をもたらす——また、他に劣らず重要なのだが——進歩的な過程」（Wehler, 1975=1977: 35-36）である。

また、「比較歴史社会学」とは「諸社会（ないしその下位領域）の比較、あるいは社会（ないしその下位領域）の歴史的変動の説明になんらかのかたちで関心をもつ経験的（実証的）研究を総称したもの」³を指す。

従来の社会学において、ウェーバーの社会学はしばしば「近代化論」と呼ばれてきた。このような説明は、1950年代以降のアメリカを中心にした近代化論の隆盛後につけられたものである。

しかるに上智大学国際研究所に設けられた研究プロジェクト「近代化論再検討研究会」の席上で、ウェーバーの文献学的研究によって著名な安藤英治が、ウェーバーは「近代化という言葉を実際使っているかと申しますと、これがあまり使っていない」（安藤，1972: 174）と発言していることに注目したい。

2 ウェーバーの比較歴史社会学について詳細に検討した先行研究として、（Kalberg, 1994 = 1999）、（折原，2009）があげられる。

3 筒井・田中（1997: 1）における「歴史社会学」概念の説明を拡大解釈した。

ウェーバーが *Modernisierung* という言葉を使っているのは、『宗教社会学論集』第2巻「ヒンドゥー教と仏教」における原始仏教について述べている「冥想技法（カンマスターナ）の近代化」（GAzRS, II : 240 = 深沢訳：320）の箇所と、『政治論集』の論文「新秩序ドイツの議会と政府」における「経済の近代化」「国家の近代化」（PS: 320 = 中村ほか訳：350）だけであり、「言葉という意味においては、『近代化』論というのはウェーバーにはない」と安藤（1972: 176, 180）は述べる。

近代化論は、初期近代化論（例えば W.W. ロストウ『経済成長の諸段階』（Rostow, 1960 = 1961））にしろ、B. ムーア Jr.『独裁と民主政治の社会的起源』（Moore, 1966 = 1986-87）に代表される「修正された近代化研究」（Wehler, 1975 = 1977）にしろ、「A から B へ」という図式抜きには考えられない。

ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が、「前近代社会から近代社会へ」という二項図式で解釈され、その「合理化」論が二項図式に重ね合わされ理解される傾向が強い。

しかし、「A（前近代社会）から B（近代社会）へ」という二項図式に必ずしも収まらないことが、ウェーバー社会学の魅力ではないだろうか。たとえば、野口雅弘は、ウェーバーにおいて「それほど明確な二項対立関係」はなく、「さまざまな観点が具体的な局面ごとに重層的に積み重ねられ」ている「多遠近法主義（Polyperspektivismus）」（野口, 2011: 196, 151, 20）こそウェーバー的方法的特徴であると指摘している。

『宗教社会学論集』「序言」における、西洋文化の「合理主義」は、「きわめてさまざまな意味に解することができ」、「一つの観点から『合理的』であることがらが他の観点からみれば『非合理的』であることも可能」（GAzRS, I = 大塚・生松訳：22）であるとの指摘は、その「多遠近法主義」の一つの現れといえよう。このように考察することにより、近代化論とは異なる見方が可能になる。

3 「試験」からのアプローチ

そこで、マックス・ウェーバーの比較歴史社会学的方法をより具体的に分析するために、彼が「試験」についてどのように論じているか、というパースペクティブからアプローチする。「試験」に着目する理由は、試験が「もともと客観的で合理的な、また公平な能力評価の手段であ」(天野, 1982 = 2006: 38) り、幅広く社会的分析——特に比較歴史社会的分析、すなわち諸社会を比較し、社会の歴史的変動を説明する分析——になじみやすい性格を有しているからである。

ウェーバーの「試験」——あるいはこれより広くとって「教育」——についての社会的考察を論じた先行研究を参照しよう。森重雄(1983)は教育社会学においてウェーバーがどのように言及されてきたかを整理し、「なぜ近代西洋にのみ教育システムとそれを支える思想が成立したのか」を説明するが、試験については部分的にしか触れていない。

尾中文哉(1989)は、フーコー『監獄の誕生』やファン＝ヘネップ『通過儀礼』をふまえて「儀礼としての試験」という見地から「試験」の比較社会学を体系的に論じている。ウェーバーについては、『支配の社会学』、とくに近代官僚制論が参照されている。

さらに、天野郁夫(1982 = 2006)は、現代産業社会の特徴としての学歴主義を、はじめて本格的にとりあげたのがウェーバーであることを明示し、「教育と選抜」という枠組み内で試験制度がどのような位置を占めるかについて論証した。ウェーバーが試験や学歴主義に関心を寄せた理由として、天野は「当時のドイツが、ヨーロッパ諸国のなかでも、もっとも学歴主義化の進んだ社会であった」こと、そして「ドイツは行政官僚の任用制と大学での専門教育とを、競争的な試験制度によって結びつけた最初の国」(天野, 2006: 20)であったことを挙げる。天野による研究が、今なおこの領域における里程標であると考える。

ただし、いずれの先行研究もウェーバー自身が、当時のドイツにおいてどのような教育や試験を受けてきたのか、そのライフ・ヒストリーを視野に入っていない。以上の点を加味すると、本研究の問題構成はより鮮明になるの

ではないだろうか。

そこで、ウェーバーの試験についての理論的考察を、ドイツ社会および彼自身の経験した試験につなげて、さらに中国における官僚任用試験＝科挙と比較しながら、社会の歴史的変動を説明する分析の方法を探っていく。

4 試験の理論

ウェーバーは、「支配の社会学」の官僚制的支配の箇所では「専門試験」という語を多用する。「近代的な完全官僚制化が初めて合理的・専門的な試験制度の不断の発展をもたらした」(WuG＝世良訳『支配Ⅰ』:136)。また官僚の地位は「専門試験に合格することが必要である」(WuG＝世良訳『支配Ⅰ』:63)。

ではなぜ「専門」試験という言葉を使うのかといえ、**「専門」**ではない試験が存在するからである。「教育制度の基礎に関するあらゆる議論の背後には、古い『文化人』タイプ対『専門人』タイプの闘争が、何らか決定的な箇所に伏在している」(WuG＝世良訳『支配Ⅰ』:139)。「専門人」を選抜するための試験が「専門試験」であることは明らかであるが、「文化人」あるいは「教養人」ともよばれるタイプについて、ウェーバーは次のように説明する。「封建制的・神政政治的・家産制的支配構造において、イギリスの名望家行政において、昔の中国の家産制的官僚制において、……教育の目標と社会的評価の基礎とは、『専門人』であったのではなく……『教養人』であった」(同)。ここでは特に中国の官僚制における「文人的教養」に注目したい。

中国の官僚任用試験である科挙は「一種の教養試験であり、受験者が紳士(ジェントルマン)であるかを判定したのであって、彼が専門知識を備えているかどうかを判定したのではない。」それは「貴人は器ならず、という孔子の根本原理」(WuG＝世良訳『支配Ⅰ』:243)に端的に現れている。ここに、「専門人／教養人」「専門試験／教養試験」という二項図式が認められる。

なお中国の科挙制度について、天野の研究により補足説明を行う。中国では隋の時代から1905年まで1300年以上にわたって科挙と言う官僚任用制が

実施された。これは、「世界最初の、しかもきわめて整備された競争的選抜の制度」であり、「競争の場として試験の制度をつくりあげた」（天野，2006: 55-56）。ただし、試験ではかられた「学識」の内容が「法律や財政の知識といった専門的な、実務的能力ではなく、文学を含む古典の教養であった」（同：57）点に特徴がある。教養試験は、以上の性格を有し、中国の家産官僚制を強力に支えていた。

5 ドイツ社会の位置づけ

再び「専門試験」に戻ると、ウェーバーは「専門訓練と専門試験……、その（ヨーロッパにおける）主要な発祥地たるドイツ」（*WuG* = 世良訳『支配Ⅰ』：136-137）と説明し、ドイツを専門試験と結びつけている。

また、彼が専門試験について理論的に論述している箇所を、当時のドイツ社会を念頭に置いて記述している、と見ることができる。「専門試験の導入を求める声が、あらゆる分野で高まりつつある……〈が〉、教育免状の所持者のために地位の供給を制限し、これらの地位を彼らだけで独占しようとする……。この独占のための普遍的な手段は、今日では『試験』であり、それ故にこそ、試験が制しがたく進出をつづけているのである」（*WuG* = 世良訳『支配Ⅰ』：137）。天野は、この「教育免状」を現在でいう「学歴」と同義である、と説明している（天野，2006: 19）。試験や学歴がものをいう社会の到来をウェーバーは見据えていた。³でも述べたように、ヨーロッパで官僚の任用試験制度の「先鞭をつけたのはドイツ（プロイセン）」であり、18世紀はじめには司法官僚の任用について、そしてやがて行政官僚の任用についても競争試験の制度が設けられた。中国の科举制度が一貫して学校教育制度と無縁であったのに対し、ドイツでは「中国の科举と違って学校、とくに大学の制度と不可分に結びつけられていた」（前掲書：74, 57）。

このようにウェーバーが、ドイツと中国を比較して、両者の相違点を説明している。それと同時に、彼が両国の共通点を示唆していることにも目配りする必要がある。それは「教養」をめぐることである。彼は中国研究「儒教と道教」の「読書人 *Literaten* 身分」の章において、「中国は、もっともひたむ

きに——ヨーロッパの人文主義時代や、最後にはドイツなどよりもはるかにひたむきに——文学的教養だけを社会的尊敬の尺度にした国であった」(GAzRS, I = 木全訳: 187)と説明している。ここには、中国の読書人と比較しうるドイツの知識人層——「ドイツ読書人 German mandarin」(Ringer, 1969 = 1991)、あるいは「教養市民層」(例えば野田, 1988, 1997)ともよばれる——の存在が透かしてみられる。

ウェーバーは、読書人が高い文学的教養を身につけていることと、(読書人エリートを除く)大衆のあり方が呼応していることを指摘する。「民衆の眼には、上々の成績で試験に合格した中国の受験生出身の官吏は、決して単に学識によって資格証明された官職候補者であっただけでなく、また呪術的性質の確かな担い手でもあった」ように、「一般民衆の見解は……呪術的・カリスマ的意味をこの試験に結びつけていた」(GAzRS, I = 木全訳: 212)。ウェーバーの「合理化」論は、呪術からの解放＝脱呪術化をひとつの重要な指標にしているのだが、中国では、教養を身につけた読書人エリートと「呪術の園」にいる大衆の間の断絶が見られる。ウェーバーは、この指摘によって、中国だけでなく、ウェーバー自身の生まれ育ったドイツ社会のエリート—大衆関係をも暗示しようとしているのではないか (cf. 野田, 1988)。

このように、ウェーバーは、いくつかの二項図式「専門人／教養人」「専門試験／教養試験」「ドイツ／中国」等を「さまざまな観点が具体的な局面ごとに重層的に積み重ねられ」ている「多遠近法主義」(野口, 2011: 151)を比較歴史社会学の方法として使用している、と見ることができる。

6 ウェーバー個人のライフ・ヒストリー

ドイツにおいて試験制度が発達していたことが、ウェーバーの研究に影響を及ぼしただけでなく、彼自身が青年期に受けた教育や試験もが、彼の社会学に影をおとしている、と見ることも可能である。

そこで、彼自身の青年期について、妻マリアンネ・ウェーバーが編集した『青年時代の手紙』(JB = 阿閉・佐藤訳)と本書を(佐藤自郎とともに)翻訳した阿閉吉男による初期ウェーバー研究(阿閉, 1973)を参考にしながら

ら、考察を進めていく。

『青年時代の手紙』はマックス・ウェーバー（1864-1920）の12歳時（1876）から29歳時（1893）までの主に近親者宛の手紙121通を収めている。マリアンネによる「序」および「訳者あとがき」によれば、彼の経歴（とくに試験と関連の深い経歴）は以下のとおりである。

1876年 - 1882年 シャルロッテンブルク（ベルリン）のギムナジウムの生徒時代。

1886年 ゲッティンゲンで第一次司法官試補試験受験。

1887年 - 1891年 ベルリンで司法官試補および官吏試補を勤める。

1889年 学位取得（中世商事会社の歴史）。

1890年 ベルリンで第二次官吏試補試験受験⁴。

1892年 大学教授資格取得（ローマ農業史）。

ベルリン大学私講師（商法およびローマ法担当）。

1893年 ベルリン大学員外教授（商法およびドイツ法担当）。

1894年 フライブルク大学正教授（国民経済学）。

日本でウェーバーは社会学者とみなされているが、実際ウェーバーは最初から研究者を目指していたわけではない。

以下に手紙の一部を引用する。

[将校任官試験]

1884年9月2日 母宛

「将校任官試験のために勉強しなければなりません。その結果にはとても関心がありますが、たしかにまだどうなるかは何とも……」（JB＝阿閉・佐藤訳：146）

1884年9月29日 父宛

「懸命な猛勉強とまったく厄介な訓練が始まりましたが、ようやく土曜日の

4 当時のドイツで高級官僚の地位につくために、二つの試験に合格しなければならなかった（天野，2006：74）。

晩に終わりました」

「わたしの試験は最優等 (summa cum lauda) と評価されました」(JB = 阿閉・佐藤訳:149)

[大学卒業試験]⁵

1886年1月24日 母宛

「かれ (=フレンスドルフ教授) のところでドイツ法制史の試験を受けさせてくれました」

「ギムナジウム卒業資格試験が済んでからは、まじめにきわめて細かいところまで質問されたことがまったくないというのは実に妙なもので、これまでいつも確固不動であるとおもっていた多くのことが、だれかに質問されると突然、まったく疑わしいものにみえてくるというのは、とても不思議な心理現象です」(JB = 阿閉・佐藤訳:218)

1886年2月17日 母宛

「もう大学卒業試験受験者となって、いまやただ卒業証明を手にするのを待つばかりです。

試験にはさしあたりまったく問題でなく」(JB = 阿閉・佐藤訳:220)

[大学卒業試験 + 第一次司法官試験補試験]

1886年3月7日 弟アルフレート宛

「勉強に追われず、筆記試験の開始が目前に迫っていなかったら、君のとても親切な手紙にもっとずっと早く返事をかいていたでしょう」(JB = 阿閉・佐藤訳:223)

[官吏試験補試験]

1887年9月30日 伯父ヘルマン・バウムガルテン宛

5 ドイツの大学では「今日のような学年末の試験などしなかった」(潮木, 1992:195)。

「どうしても官吏試験を受けることを断固決意している」

「当分、純学問的活動というものも自分にとっては、……ほとんどその魅力
を失っていました」

「司法官試験の仕事はかなり好ましい様相を呈しています」(JB = 阿閉・佐
藤訳: 319-320)

[学位取得]

1889年7月30日 伯父ヘルマン・バウムガルテン宛

「いま、仕事を幸い片付けましたし、(最優等 *magna cum laude* なので) よ
うやくほっとしています」

口述試験のさいに「もう少し長くかれら(=試験委員)がわたしを質問攻め
にしてほしかったのですが。なぜなら、そのさい本当に何か学ぶことができ
るからです」(JB = 阿閉・佐藤訳: 366-367)

[官吏試験+大学教授資格取得]

1889年8月14日 従妹エミー・バウムガルテン宛

「わたしはまったくもう一度、来年に迫っている二つの楽しみ、つまり官吏
試験と大学教授資格取得のことを考えはじめなければなりません」(JB
= 阿閉・佐藤訳: 371)

1889年12月31日 伯父ヘルマン・バウムガルテン宛

「新しい年の始めとともに第二次国家試験と、やれうれしや、わが生涯の最
終試験をまったく本気で考えることが肝心です」(JB = 阿閉・佐藤訳: 378)

[私講師]

1891年1月3日 伯父ヘルマン・バウムガルテン宛

「白状すれば、成り行き待ちの無給の司法官試験と官吏試験から同様に成り
行き待ちの無給の私講師に移ることを、わたしは……まったく我慢しなければ
考えられません」(JB = 阿閉・佐藤訳: 382)

1892年2月18日 従妹エミー・バウムガルテン宛

「わたしはいまついに、ほとんど耐えがたく退屈な予備段階のあとである種の終末に到達しましたが、それは、わたしが次の学期に当地（＝ベルリン大学）で講義してよく、いまついにこの世でのわたしの、おそらく最終の試験に及第した確信をもつかぎりです」

「まったくぞっとする思いで、わたしは司法官試験時代の大部分を回顧できます」(JB＝阿閉・佐藤訳:396)

「最終試験」とは大学教授資格試験を意味するものと思われる。また、ウェーバーが「教育免状」と「長期の無収入期間」について以下のように記していることは、ドイツ社会における彼自身の経験を踏まえている、とも解釈できる。

「試験が制しがたく進出し続けている……。しかも、教育免状の獲得に必要な教育過程は、多大な費用と長期の無収入期間とを伴うものであるから、前述の（＝教育免状の所持者のために地位の供給を制限し、これらの地位を彼らだけで独占しようとする）努力は、同時にまた、財産のために才能（「カリスマ」）を押しつけるということを意味している」(WuG＝世良訳『支配Ⅰ』:137-138)。

以上のようにウェーバーの生まれ育ったドイツ社会と彼自身のライフ・ヒストリーが彼の社会学と深く関連していることが見てとれる。

7 おわりに

ウェーバーは中国の官僚任用試験（科挙）と比較しながら、なじみのあるドイツの試験を相対化し、さまざまな二項図式を駆使することにより、自身の比較歴史社会学の方法を形成していったと見ることができる。

では、われわれ日本の研究者は、以上のウェーバーの議論から何を学ぶべきか。たんにウェーバーの分析を無批判に受け入れるよりも、日本の経験と諸外国のそれとを比較して、より広い枠組みに位置づけることも一つの有効な方法であろう。たとえば天野郁夫（1982＝2006, 1983＝2007）が、

ウェーバーの研究を踏まえながら近代日本の教育・試験を分析している事例は、たいへん示唆的である。

[参考文献]

＜ウェーバーの著作＞

ウェーバーの著作からの引用文は、次のような略記を用いている。

GAzRS, I : *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, 1920, J.C.B.Mohr. (Paul Siebeck)

大塚・生松訳：大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』1972年，みすず書房。

大塚訳：大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1989年，岩波文庫。

木全訳：木全徳雄訳『儒教と道教』1971年，創文社。

GAzRS, II : *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, II, 1921, J.C.B.Mohr. (Paul Siebeck)

深沢訳：深沢 宏訳『ヒンドゥー教と仏教』2002年，東洋経済新報社。

PS: *Gesammelte Politische Schriften*, 5.Aufl., 1988, J.C.B.Mohr. (Paul Siebeck)

中村ほか訳：『政治論集』1・2，1982年，みすず書房。

JB: *Jugendbriefe*, 1936, J.C.B.Mohr. (Paul Siebeck)

阿閉・佐藤訳：マリアンス・ウェーバー編，阿閉吉男・佐藤自郎訳『マックス・ウェーバー
青年時代の手紙』上・下1973年，勁草書房（＝1995，新版，上・下，文化書房博文社）。

WuG: *Wirtschaft und Gesellschaft*, 4.Auflage, 1956, J.C.B.Mohr. (Paul Siebeck)

世良訳『支配Ⅰ』：世良晃志郎訳『支配の社会学』Ⅰ，1960年，創文社。

世良訳『支配Ⅱ』：世良晃志郎訳『支配の社会学』Ⅱ，1962年，創文社。

＜ウェーバーの著作以外＞

天野郁夫，1982，『教育と選抜』（教育学大全集5）第一法規出版。（＝2006，『教育と選抜
の社会史』ちくま学芸文庫。）

天野郁夫，1983，『試験の社会史——近代日本の試験・教育・社会——』東京大学出版会。
（＝2007，増補版，平凡社ライブラリー。）

安藤英治，1972，『ウェーバーと近代——一つの社会科学入門——』創文社。

阿閉吉男，1973，『初期のマックス・ウェーバー』勁草書房。

- Kalberg, Stephen, 1994, *Max Weber's Comparative-Historical Sociology*, Polity Press. (= 1999, 甲南大学ヴェーバー研究会訳『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』ミネルヴァ書房.)
- Moore, Barrington, Jr., 1966, *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*, Beacon Press. (= 1986-87, 宮崎隆次・森山茂徳・高橋直樹訳『独裁と民主政治の社会的起源』Ⅰ・Ⅱ, 岩波書店.)
- 森 重雄, 1983, 「ウェーバーの教育社会学——教育システムの理論の系譜と課題(2)——」『教育社会学研究』38: 185-197.
- 野田宣雄, 1988, 『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ——』名古屋大学出版会.
- 野田宣雄, 1997, 『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫.
- 野口雅弘, 2011, 『比較のエートス——冷戦の終焉以後のマックス・ウェーバー——』法政大学出版局.
- 尾中文哉, 1989, 「試験の比較社会学——儀礼としての試験——」『思想』778, 96-111.
- 大川清丈, 1990, 「ウェーバー近代化論の再検討」京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 大川清丈, 1991, 「ベンディクス比較近代化論の検討」『ソシオロジ』35(3): 37-51.
- 大川清丈, 1993, 「近代化と日本的『平等』観」『ソシオロジ』38(2): 37-52.
- 大川清丈, 1996a, 「比較歴史社会学の論理——スコッチポル説の検討——」『哲學論集』大谷大学哲学会, 42: 48-59.
- 大川清丈, 1996b, 「マックス・ウェーバーの比較方法——比較レベルと自己相対化をめぐる——」『ソシオロジ』41(1): 19-33.
- 大川清丈, 1997, 「ラインハルト・ベンディクス『国王か人民か』(1978)」筒井清忠編『歴史社会学のフロンティア』人文書院, 91-97.
- 大川清丈, 2010, 「新聞投書欄から見た『受験』と努力主義」尾中文哉・大川清丈・白鳥義彦, 2010, 『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察(中間報告)』2007年度～2009年度科研費研究成果報告書, 6-17.
- 大川清丈, 2012, 「近代化論から歴史社会学への転換——個別性と普遍性をめぐって——」第85回日本社会学会大会(於: 札幌学院大学)報告要旨集.
- 大塚久雄, 1966, 『社会科学の方法——ヴェーバーとマルクス——』岩波新書.

- 折原 浩, 2009, 「比較歴史社会学——マックス・ヴェーバーにおける方法定礎と理論展開——」 小路田泰直ほか『比較歴史社会学へのいざない——マックス・ヴェーバーを知の交流点として——』 勁草書房, 1-142.
- Ringer, Fritz K., 1969, *The Decline of the German Mandarins: The German Academic Community, 1890-1933*, Harvard University Press. (= 1991, 西村 稔訳『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人——』 名古屋大学出版会.)
- Rostow, W.W., 1960, *The Stage of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto*, Cambridge University Press. (= 1961, 木村健康・久保まち子・村上泰亮訳『経済成長の諸段階』 ダイヤモンド社.)
- Skocpol, Theda, 1984a, "Sociology's Historical Imagination," in Theda Skocpol(ed.), *Vision and Method in Historical Sociology*, Cambridge University Press, 1-21. (= 1995, 小田中直樹訳「社会学の歴史的想像力」『歴史社会学の構想と戦略』 木鐸社, 11-29.)
- Skocpol, Theda ed., 1984, *Vision and Method in Historical Sociology*, Cambridge University Press. (= 1995, 小田中直樹訳『歴史社会学の構想と戦略』 木鐸社.)
- Skocpol, Theda and Margaret Somers, 1994, "The uses of comparative history in macrosocial inquiry," in Skocpol, Theda, *Social Revolutions in the Modern World*, Cambridge University Press, 72-95. (= 2001, 牟田和恵監訳, 中里英樹・大川清丈・田野大輔訳「マクロ社会分析における比較歴史学的方法の利用」『現代社会革命論——比較歴史社会学の理論と方法——』 岩波書店, 29-62.)
- 富永健一, 1998, 『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』 講談社学術文庫.
- 筒井清忠・田中紀行, 1997, 「序論」筒井清忠編『歴史社会学のフロンティア』 人文書院, 1-7.
- 潮木守一, 1986, 『ドイツ大学への旅』 リクルート. (= 1992, 『ドイツの大学——文化史的考察——』 講談社学術文庫.)
- Wehler, Hans-Ulrich, 1975, *Modernisierungstheorie und Geschichte*, Vandenhoech & Ruprecht. (= 1977, 山口 定・坪郷 実・高橋 進訳『近代化理論と歴史学』 未来社.)

Weber's Comparative-Historical Sociology from the Perspective of “Examinations”

OKAWA Kiyotake

Abstract

This article examines Max Weber's comparative-historical sociology from the perspective of “examinations.” Weber's sociology has often been described as a *modernization theory* that discusses the transition from pre-modern societies to modern ones. Weber, however, rarely used the term *modernization*; rather, he performed his analysis using multidimensional points of view, piecing together various dichotomies. Accordingly, Weber's comparative-historical sociology discusses the dichotomy of “specialized/liberal arts examinations” regarding civil service examinations in Germany and China (up to 1905). Also, I refer to the positioning of German society where he lived and the examinations he took in Germany.

Keywords: examination, Max Weber, comparative-historical sociology

